手芸考

次なる「手芸」へ

ひろい のぶこ　染織造形作家／京都市立芸術大学教授

お金のため？ アートや自己表現のため？ 家事のため？「手芸」をおこなうのは何のためなのか。手を使うという人間としてのより根本的な「営み」ととらえたとき、何が見えてくるのだろう。

資料を見ながら作り方を考える授業

〝手芸〟の増殖とアートの拡張

手芸ということばをインターネット検索してみると、その範疇（はんちゅう）は驚くほど広い。これまで美術工芸と見なされてきたものも吸引しつつ、拡大していることは明白だ。

インターネットの解釈では、造形美術系の大学でおこなわれている実技科目のうち、映像やコンピューターそしてパフォーマンス等を除いたほぼすべてのメディアが〝手芸〟に含まれることになる。たしかに手の技であり、手の芸である。

そこでは染織、陶磁器、木竹工や漆、和紙はもとより、各種の絵画、彫刻も横並びだ。そして、描く、塗る、彫る、縫う、織る、組む、染めるなど多様な造形手法が網羅され、木、竹、土、石、貝、革、布、糸、紙、ガラス、金属、樹脂などの手で加工できるあらゆる素材が同列である。もはや手芸領域は造形芸術を飲み込んだのだろうか。

しかし思い返すと、平面や立体を問わず、いわゆる手芸的手法を取り込んだアート作品を目にするようになってすでに久しい。そもそもアートは貪欲なのである。

教育の現場では

日々接する学生たちの幼少期における自然や素材との体験が、かつてより脆弱（ぜいじゃく）だと感じるのはわたしだけではないだろう。

人間の創作活動は視覚のみならず、皮膚感覚と深い関係にあり、手指の運動能力が脳の発達に大きくかかわっているという事実を、遠い未来への準備段階でもある教育の場で軽視してはならない。多様な物質と手による接触体験は、現代人には以前に増して大切なはずだ。

我々が手芸と聞いて思い出すのは、かつて家庭科の授業で刺繍（しゅう）や縫物の課題で苦心した遠い記憶だろうか。

兵庫県立西脇高校生活情報科が文科省からスーパー・プロフェッショナル・ハイスクールの研究指定を受けたことから、わたしはここ数年研究推進委員として高校教育の一端を垣間（かいま）見ることになった。

その内容とは、西脇市の地場産業である綿織物のデザインから起こして、オリジナルの生地作り、縫製作業、ファッションショーで発表し、それをブランド化して海外へ発信しようという壮大な試みである。

ファッションショーに向けて高校生たちが縫製をする

ここの生活情報科は一九九七年に家政科を改称したのだが、その内容もまた時代につれて変化しているのだ。指定されたプロジェクトは、従来の家族のために手作りする事からは距離をおき、さまざまな様態で物を生産し、積極的に社会にかかわっていこうとする姿勢が顕著である。若い世代のそうした経験を文科省は奨励しており、いわば広義のデザイン活動だとも言える。

人は手仕事に惹かれる

近年、手芸のイヴェントが大きな集客力を持ち、個人製作や少量生産の手仕事が価値を増している。またインターネット上での商業的な成功が、こうした動きを後押しいている。

七月にリトアニアで展覧会があり、そこに出品するのを機に初めてバルト三国を訪れた。リトアニアはもちろん、ラトビアやエストニアでも、民族衣装が機会あるごとにコミュニティで着用される。こうした地元の需要があるために、それに用いる材料や織物や紐（ひも）、リネンや刺繍等の素材が専門店に並んでいる。生地から織る人もいるが、最近は半製品を買いそろえて縫製し、不足のものを購入するという選択肢もある。こうした手間のかかった製品や素材が手に入るというので、日本をはじめ海外からの観光客が徐々に増えている。こうなると、色彩豊かな編物や刺繍といった手芸が、バルト三国における大きな観光資源であると言っても過言ではない。

タリン市内の店内。民族衣装の展示は見応えがある

手の芸のこれから

このように手作り製品の展示会などを見渡してみると、自らの身体は使わず、他人による手仕事を求めているようだ。そこでの欲求は、何であろう。美しいもの、愛らしいもの、丹念な手業、卓越した技巧、あるいはお買い得で心地良い身辺の雑貨なのだろうか。

これまで我々は過去から長いあいだ、生活上の必要に迫られて、物を作り続けてきた。また知らず知らずのうちに自ら作ることで得られる快感や達成感、美的欲求にけん引されてきた。

また最近知ったのだが、手や指先を動かすことによって、人間は心の安らぎを得ることができるという。例をあげると、手縫いや糸を紡ぐなどの慣れた作業をすると心身はリラックスして、α波という脳波が出ることが確認されているという。

人間だけがものを作り出すことができ、そのことに依（よ）って更なる能力を磨き、ここまで生き延びてきた。単にパネルをタッチするだけではなく、過去に遡って手と手仕事への敬意を思い起こしたい。

そして、次なるモノづくりもまた手から始めたいと思う。